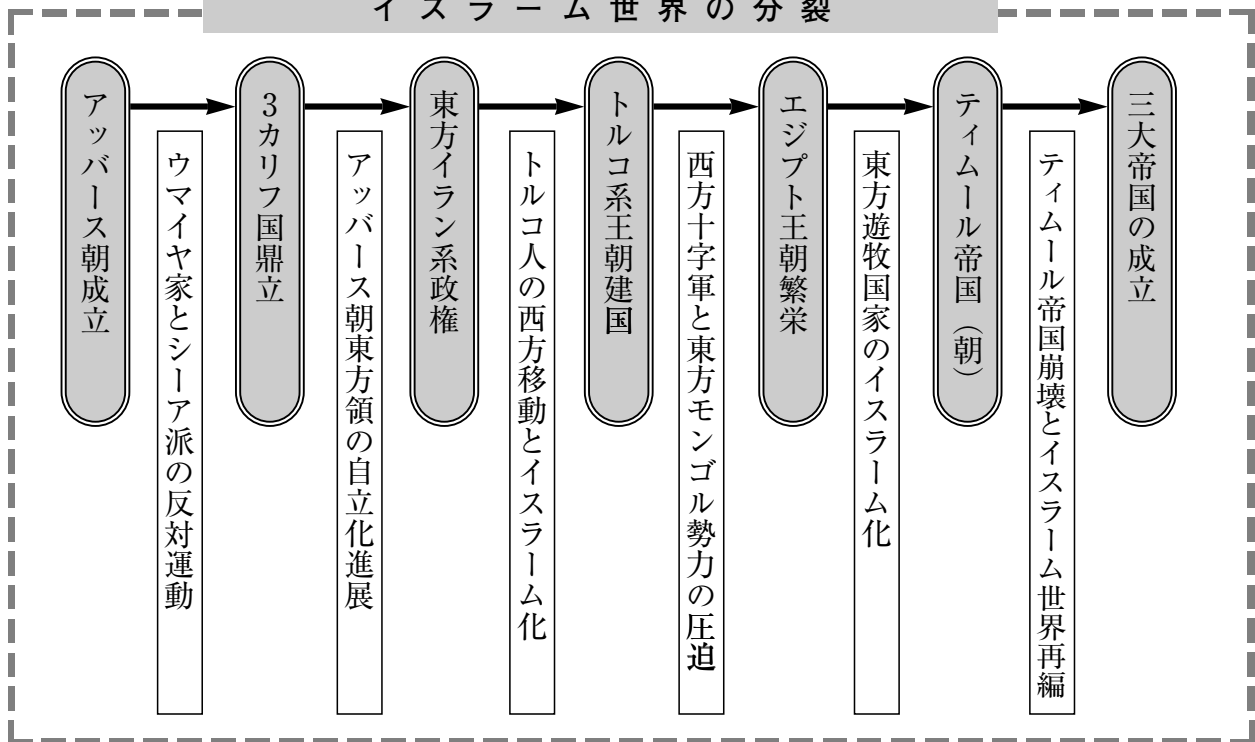


イスラーム世界の分裂



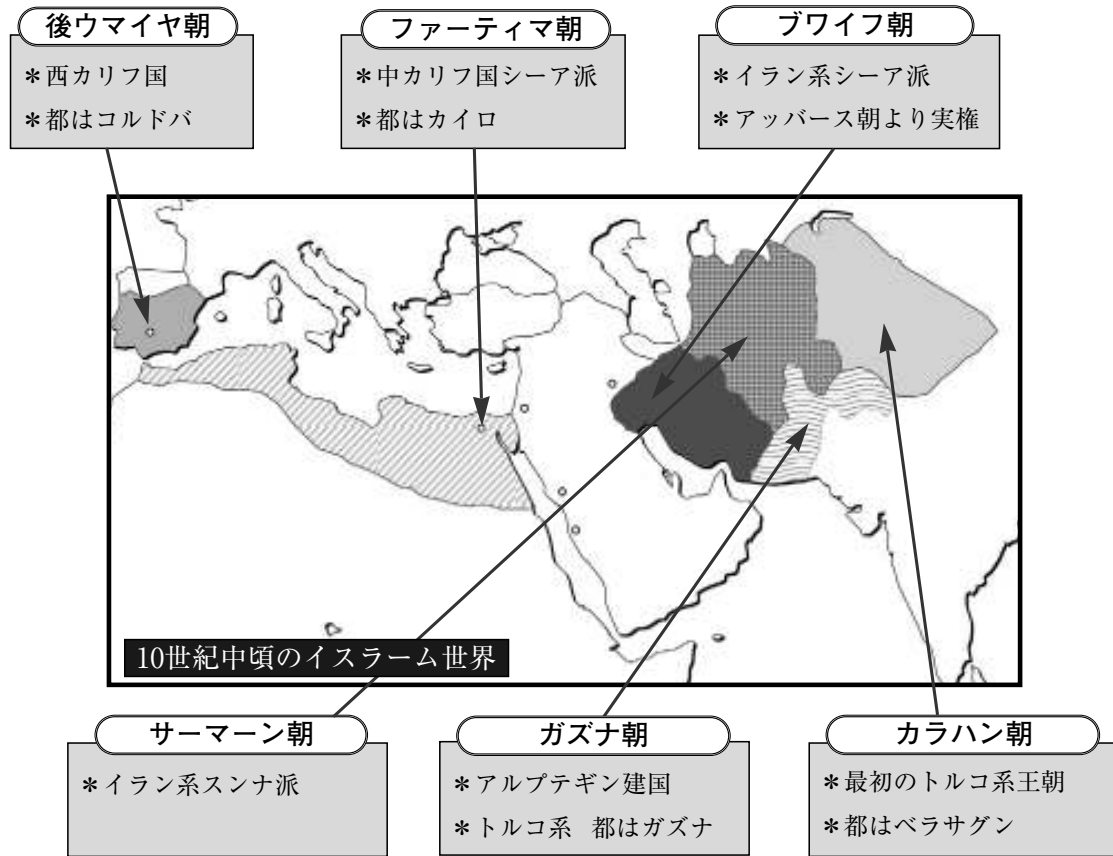
本章概観：イスラーム世界の分裂

アッバース朝のウマイヤ朝関係者への厳しい処断とシーア派への弾圧政策は、両者の不満を高め、イスラーム世界分裂の契機となった。まずウマイヤ朝の一族がイベリア半島に逃れて後ウマイヤ朝を建国し、シーア派の一派は、チュニジアに建国したのちエジプトをも支配してファーティマ朝を樹立する。ファーティマ朝はアッバース朝に対して公然とカリフの位を称し、対抗上、後ウマイヤ朝もカリフを称した。ここにイスラーム世界は3カリフ国の鼎立の時代にはいる。そのころすでにアッバース朝東方領ではイラン系軍事政権の自立化が進んでいた。中央アジアに建国したサーマーン朝は、西進するトルコ人をマムルーク（軍人奴隷）としてイスラーム世界に供給し、イラン地方を支配したブワイフ朝（穏健シーア派）はついにバグダードに入城してアッバース朝カリフの実権を奪い最初の武人政権を樹立する。しかし、イラン系軍事政権の時代も長くは続かなかった。9世紀のウイグル滅亡後本格化したトルコ人西進の動きは、最初のトルコ系イスラーム王朝であるカラハン朝を成立させ、アフガニスタンに建国したガズナ朝とともに、サーマーン朝を圧迫した。トルコ人に対する防波堤の役割を果たしていたサーマーン朝が滅亡すると、トルコ人は部族単位で大量にイスラーム世界に進出し、各地にトルコ系イスラーム王朝を建国していくのである。そのうちセルジューク朝は1055年にバグダードに入城し、初めてスルタンを称することになった。

11世紀末から13世紀にかけてはイスラーム世界の危機の時代である。西欧の拡大運動は十字軍とレコンキスタ（国土回復運動）としてイスラーム世界を圧迫し、モンゴル高原に出現したモンゴル帝国は、東方イスラーム世界を次々に征服して1258年にはついにアッバース朝を滅ぼした。この危機の時代にイスラーム世界を支えたのは、エジプトに成立したアイユーブ朝と、それに続くマムルーク朝である。アイユーブ朝の祖サラディンはイェルサレムを奪回し、マムルーク朝はモンゴル勢力の西進を阻止することに成功した。その後東方を支配したモンゴル系のイル＝ハン国とチャガタイ＝ハン国ではイスラーム化が進み、それぞれイラン＝イスラーム文化、トルコ＝イスラーム文化が繁栄する。そして西チャガタイ＝ハン国の混乱から出現したティムールが、14世紀の終わりから15世紀にかけて大帝国を建国したのち、16世紀にはその崩壊の過程から、イランにサファヴィー朝、インドにムガル帝国が成立する。両者は小アジアから勢力を拡大し、マムルーク朝を滅ぼしたオスマン帝国とともに、イスラーム世界を三分し、いわゆるイスラーム三大帝国の時代が、ここに始まるのである。

第1講

[1] アッバース朝の衰退と3カリフ国の鼎立 9世紀～10世紀のイスラーム世界



(1) アッバース朝 (750～1258) の衰退

- ・西方辺境地域の自立…ウマイヤ家, シーア派 (アリー家) と結ぶ
 - ・後ウマイヤ朝 (756～1031) …イベリア半島にウマイヤ家が建国
 - ・イドリース朝 (789～926) …モロッコにシーア派が建国
- ・内政の混乱
 - ・9世紀中頃, トルコ系マムルーク軍人の台頭でワズィール (宰相) 中心の官僚機構が弱体化
 - ・ザンジュの乱 (869～883) …南イラクのバスラ付近でおきた黒人奴隷の反乱
- ・地方軍事政権の自立…イラン系・トルコ系など, 半独立の地方軍事政権が成立
 - ・トゥールーン朝 (868～905) …エジプト・シリアを支配したトルコ系軍事政権
 - ・サーマーン朝 (875～999) …中央アジア西部のイラン系軍事政権
 - ・ブハラを都→ブハラ・サマルカンド・メルヴなどの商業都市が繁栄
 - ・隣接するトルコ系遊牧民のイスラーム化を推進
 - ・トルコ系遊牧民の奴隷を貿易で扱って繁栄
 - ・カラハン朝によって滅亡 (999)

知識を深めよう ジャーヒズ (775~868)

ペルシア人(イラン人)のけちぶりを風刺した『けちんぼども』や、博物学の基礎となった『動物の書』で有名なジャーヒズ(775~868)は、ティグリス河口の町バスラで生まれた。彼はキナーナ族の〔①〕(非アラブ人イスラーム改宗者)の家系に生まれたが、祖先は〔②〕(エチオピア)出身の黒人奴隷であったといわれる。このため、ジャーヒズの皮膚の色は黒く、容姿については自ら悪魔のモデルにされたと述べているが、その人柄と才能によって多くの人に愛され、後援者に困ることはなかった。ちなみに名前のジャーヒズは“目の出た人”という意味で、本名はアブー=ウスマーン=アムル=イブン=バハル。彼は816年にアッバース朝の第7代カリフのマムーン招きの都〔③〕に移り、その後約50年間にわたって〔③〕とサーマッラーで次々に著作を発表した。当時のイスラーム世界は、アラブ文化に対するペルシア文化の優越性を主張するシュービーヤ運動が大きな盛り上がりを見せた時期だったが、ジャーヒズはアラブの古詩や伝承を取り入れた逸話文学のジャンルを開拓してアラブ文化とアッバース朝の擁護に努めた。本好きで自らも数百編におよぶ著作を残したジャーヒズは、“書物ほど親切な隣人はいない”という名言を残しているが、書物の下敷きとなって死んだジャーヒズにとって書物は死をみとってくれた隣人でもあった。

アムルイブン① アムルイブン② アムルイブン③

知識を深めよう イブン=シーナー (980~1037)

ラテン名はアヴィケンナ。医学者であり、古代ギリシアの〔①〕哲学の研究者で、ヨーロッパの哲学・医学に大きな影響を与えたイラン人のイブン=シーナー(980~1037)は、現在のウズベキスタン共和国に位置するブハラ近郊で生まれた。14才になった時には、彼に教えることのできる教師はいなかったといわれるほどの天才だったといわれる。17才の時に〔②〕朝(875~999)の君主ヌーフ=ブン=マンスールの病気を治療したことが縁となって、宮廷文庫の利用を許可されて貴重な書物を次々に読破した。イブン=シーナーは、やがて行政にも携わるようになったが、急進シーア派の〔③〕派の同調者だったことから敵が多く、そのためブハラを去って各地を放浪した。その後、イランで〔④〕朝(932~1055)に14年間仕えた後、1037年にハマダーンで亡くなった。イブン=シーナーは、学問とは哲学と科学とを融合させるためのものであり、人間の完成とは学問で得た知識と実際の行動の融合であるとするギリシア哲学の立場から、文学・哲学・数学(ユークリッド幾何学)・医学を習得した。イブン=シーナーの著作の全貌は明らかになっていないが、哲学によって神学の問題を合理的に解決しようとした『精神治療の書』はラテン語訳されて、スコラ哲学を完成した〔⑤〕(1225頃~74)に大きな影響を与えた。また、医学序説・薬学・病理学・診断治療・薬局方の五部からなる『〔⑥〕』は、ヒポクラテス・ガレノスのギリシア医学に基づいてイスラム医学を大成したもので、そのラテン語訳は南イタリアの〔⑦〕大学をはじめとするヨーロッパの大学で17世紀頃まで医学の教科書として使用された。

アムルイブン① アムルイブン② アムルイブン③
 アムルイブン④ アムルイブン⑤ アムルイブン⑥ アムルイブン⑦